

森 元齋著

具体性の哲学

ホワイトヘッ드의知恵・生命・社会への思考

本書の構成は、第一部「具体的なもの（ほうへ）」、第二部「形而上学（ほうへ）」、第三部「生成（ほうへ）」、第四部「アナキズム（ほうへ）」、という四部形式である。後書きによれば、その内容は、著者が大阪大学に提出した博士論文「A・N・ホワイトヘッッドにおける具体的なもの（ほうへ）」を基に加筆訂正したものとのことである。

はじめの部分で、ジャン・ヴァールの著書『具体的なもの（ほうへ）』のホワイトヘッッド論が引用されている。後に『形而上学（ほうへ）』を書いたヴァールに影響を与えたホワイトヘッッドは、どこまでも直接的な経験の現場から離れず、物と概念の感得を統合する具体的経験の全体を捉えることを哲学の目標としていた。この意味での「具体性の哲学」が如何に成立したか、それを明らかにするために、ホワイトヘッッドの前期の数理哲学から、中期の自然哲学、後期の形而上学に至るまでのテキストを精査し、多くの先行研究を踏まえた上で、著者は本書の第一部の最初の三章にわたって解りやすく相述している。

著者は、このような発展史的研究を踏まえた上で、

「金子」というタイトルがついていて、昨年死去した鶴見俊輔は、ホワイトヘッッドの「ハーバード大学の最終講義を聴いた唯一の日本の哲学者であるが、その講義の主題は、「不滅性」の意味の考察であった。鶴見は、このホワイトヘッッドの最新の言葉を、『四〇年たつて耳に届く』というエッセイのなかで、大逆事件の犠牲者一人であった金子ふみ子（ラトゥール）の科学論、等々、アップ・ツデーと金子の間には、直接に何のつながりも無いが、私は私自身を生きる「一切の現象は現象としては滅しても永遠の存在の中に存続する」と私は思っている」という金子の文章は、確かにホワイトヘッッドが最終講義で言ったとしてもおかしくないものである。著者は、「未だ誰もなしていないホワイトヘッッド哲学のアナキズム的展開」をこの最終章で敢行すると述べているが、これはおそろしく見かけほど破天荒な試みではない。問題は「アナキズム」の解釈にかかっている

ホワイトヘッッドの哲学の現代的な継承と新たな展開を試みる

田 中 裕

目し、ホワイトヘッッドの哲学の現代的な継承と新たな展開を試みる。そこでは、とくにジル・ドゥルーズの『賢くライプニッツとバロック』のホワイトヘッッド

本書の最終章は、「アナキズムのほうへ、おもむく」にホワイトヘッッド、鶴見

「実的存在」の「対象的不滅性」である。このような、ホワイトヘッッドの観点が、金子が遺言のよ

いつまでも沈黙の内に語り続けるであろう。（たなかゆたか氏）上智大学教授・哲学専攻）

★もりのもとお氏は九州産業大学・龍谷大学非常勤講師・哲学・思想史専攻。大阪大学大学院博士課程修了。共著に「被曝社会年報」など。一九八三年生。



四六判・318頁・2600円
以文社
978-4-7531-0328-7
TEL. 03-6272-6536